

平成24年度西宮文学案内
秋期講座 第2回「谷川流『涼宮ハルヒ』を生んだ西宮の風景」

日時：2012年10月27日（土）13時30分から
場所：西宮市大学交流センター大講義室
講師：土居豊氏（作家・文芸レクチャー）

土居 豊

皆さん、こんにちは。時間になりましたので、まだお揃いではないかも知れませんが、はじめさせていただきますと思います。

さて、ご案内がありまして、「SOS団 in 西宮に集合よ！」というポスターをアクタ西宮をはじめ色々なところに掲示しております。何のことかわからないという方も大勢いらっしゃると思うのですが、これは今日の演題である、涼宮ハルヒシリーズの関連イベントです。これは元々、現在行われている「西宮まちたび博覧会」の関連イベントになっております。現在、アクタ西宮のジュンク堂書店へ上がるエスカレータ前の広いオープンスペースにおいて展示を行っております。今日はチラシにも書きましたように、皆さんの中でご希望の方をお連れして、こちらの展示の方にご案内しますので、ご希望の方は講演終了後に前の方にお集まりください。ついでにご説明いたしますと、展示スペースでは、西宮市内の色々なお店が掲載されているマップをお配りしております。そのお店に行くと葉がもらえまして、この葉を集めるとステッカーがもらえるというイベントになっております。

今日の話は「谷川流『涼宮ハルヒ』を生んだ西宮の風景」ということで、涼宮ハルヒの作品と作者である谷川流についての話ですが、皆さんはこの作品を小説・アニメ・映画なんでも結構ですので何らかのかたちでご覧になったことはありますでしょうか。

（参加者挙手）

会場の半数近くの方がご覧になったことがあるというのは素晴らしいことだと思います。何年か前に「涼宮ハルヒの聖地・西宮」という講座をさせていただいた時には、会場の1割くらいしかこの作品を知らないということで困ってしまった記憶がありますが、とりあえず「涼宮ハルヒの憂鬱」という作品がどういうものかということからご説明させていただきます。

谷川流の「涼宮ハルヒの憂鬱」という作品ですが、主人公のキョン君という男子高校生が語り手になっておりまして、涼宮ハルヒという美人女子高生と出会い、色々な仲間が増えて、冒険が進んでいくという、いわゆる学園もので、ライトノベルでベストセラーになっています。涼宮ハルヒを演じた声優たちも、歌手として大ブレイクを果たすなど社会現象となっています。最新の作品でありミリオンセラーにもなって話題になった「涼宮ハルヒの驚愕」が出たときに、アクタ西宮のジュンク堂書店さんが「聖地巡礼」というフェアを開催されて、様々なキャンペーンが西宮でも開催されたのが、ちょうど昨年のもので、

色々なところでメディアにも紹介されました。この作品の中に登場する登場人物たちが非常に魅力的で、映画のパンフレットをご覧くださいますと、涼宮ハルヒと長門有希という二人のヒロインを軸にして、主人公で語り手であるキョン君という男子高校生が色々振り回されながら学園生活を楽しむというような内容ですが、ちょっとひねってあります。ストーリー的には何かSF的要素があり、学園SFストーリーとなっています。高校の部室では、SOS団という謎の同好会のようなものが立ち上げられ、不思議なものを探索するという活動が行われています。このSOS団の部室というものがストーリーのキーポイントになっています。登場する部室は、作者の谷川流さんが通っておられた県立西宮北高校をモデルにしたものであるといわれております。様々な冒険を日常の中で繰り広げるわけですが、これは劇中劇のようなものでして、作品の中で彼等が文化祭の為に映画を撮影するというシーンがあります。その中で「これは西宮市内のどこそこではないか？」というような、何となく場所を彷彿とさせるような表現があり、西宮の風景が色々盛り込まれた作品になっています。ご覧いただいている写真のとおり西宮北口近辺の喫茶店が登場したり、あるいは西宮北高校というように、どこかで見た西宮の風景が描かれています。この点は、原作のライトノベルがベストセラーになったときから話題になっていたのですが、これがアニメになった際に「これは西宮のどこそこじゃないのか」と見た人が気づくわけですね。これは、2010年に公開された劇場版シリーズ4作目「涼宮ハルヒの消失」のポスターになるのですが、日本を代表するSF作家の一人である筒井 康隆さんが「大変おもしろい」と文芸雑誌で語ったこともあり、非常に名作といわれています。そんなこんなで、涼宮ハルヒシリーズは現在十数冊の作品がライトノベルにおいて出版されています。

ライトノベルがどのようなものかということの説明しますと、基本的には文庫本が多いのですが、文庫本サイズで表紙にイラストがついていて、イラストのページが何ページか続く、そして中身は漫画ではなくて小説というものです。このように基本的にはライトノベルと呼ばれるものは、イラストと小説で構成されています。イラスト表紙、イラストのページ、小説というパターンでつくられています。年齢的に私と似たような世代か少し上の世代の方であれば、「コバルト文庫」・「ソノラマ文庫」という文庫本のシリーズを読んだことがあるかと思います。元々は、SFであったり、アクションであったり、若い人向けの小説のシリーズは昔からありますが、ライトノベルはこれの進化版と考えていただいても良いかと思います。ちなみに、涼宮ハルヒの憂鬱シリーズの表紙を担当しているのが「いとうのいぢ」という若い女性のイラストレーターで大変人気があり、同じライトノベルの「灼眼のシャナ」のイラストも担当しておられます。先程紹介しました、筒井 康隆さんも若い人向けのライトノベルを出版する際に、「いとうのいぢ」さんのイラストを使っているりもします。

皆さん、涼宮ハルヒの憂鬱シリーズをお読みになったか、アニメでご覧になった方が約半数ということでしたが、これを電車の中で堂々と読む自信がありますでしょうか。まだ甘いといわれるかもしれませんが、私には残念ながらそこまでの自信はありません。少し

世代が違くと、こういった表紙のイラストに抵抗があるような方もいらっしゃるかもしれませんが。このあたり、イラストと内容はちょっと別かなと考えて読んでいただいたら良いのではないかなと思います。

それでは本題に入りますが、ここでは西宮の風景・涼宮ハルヒ・谷川流の関係をご説明したいと思います。こちらの新聞記事にご注目ください。「ハルキとハルヒ」ということで、村上春樹と涼宮ハルヒを比較研究した本を最近出しまして、これが新聞にとりあげられているわけなんです。色んなかたちで涼宮ハルヒという作品のことが各方面から注目されているという例としてご覧いただければと思います。この本の出版は、私としてはちょっとしたチャレンジだったのですが、涼宮ハルヒシリーズの出版社は角川スニーカー文庫、すなわち角川書店なのですが、涼宮ハルヒの研究本や文芸評論を出したいと相談しても角川書店側がなかなか了解してくれなかったわけです。本当は角川書店から出版できれば一番嬉しかったのですが、「涼宮ハルヒの公式本は角川書店の方から出版するのでご遠慮ください」ということでしたので、僕の方は勝手に他の出版社から出したわけです。出版後に行う各方面への献本の際には角川書店の井上社長さんにもきちんとこの本を贈りました。角川書店の井上社長さんは昔アニメ雑誌を担当・編集されていた方で、アニメ好きな方なんです。ツイッターの世界では、僕は井上社長と繋がっていて、こちらが送った本について「いま読んでいます」という返事をもらって以来、それっきり返事がない状態です。もしかしたら途中で激怒してビリビリっと本を破り捨てられてしまったのかというようなことを思っているのですが、これもチャレンジだと思っております。

さて、最初に説明しましたとおり、涼宮ハルヒのファンは幅広く各方面にいらっやっやって、世界中のアニメファンの方がこの作品をみて、日本に来て作中の風景を見にきたり、アニメに出てきた喫茶店を訪れたりするという現象が起こっているそうです。そして、この作品とゆかりの深い西宮、西宮が生んだ谷川流という作家についてご説明したいと思います。

昨年、「涼宮ハルヒの驚愕」が出版されてミリオンセラーを達成した頃に、新聞でも、この知名度を使おうとタイアップした、様々なイベントや記事が掲載されました。これは僕の記事ですが、読書雑誌のダヴィンチで村上春樹の特集をやった時に、「村上春樹と涼宮ハルヒ」という特集を組んでもらったこともあります。

では、この辺から本題に入りたいと思うのですが、西宮の風景と涼宮ハルヒの作中の風景は結構似ておまして、作品を読んでいただければ、おそらくイメージがわくと思います。アニメでご覧になった方もいらっやっやるとは思います。アニメの風景はアニメスタッフが現地で撮った写真を元に背景を描いておりますので、「あれは西宮北口の駅前じゃないのか」とわかるのですが、ライトノベルの小説を読んだ場合も「これはひょっとして西宮のことじゃないのか」とわかることが多いと言われております。本日は、アニメの「涼宮ハルヒの憂鬱」の話からは少し離れて、ライトノベル中で描写されている西宮の風景について注目してみたいと思います。

例えば、村上春樹の作品中に芦屋の河口の風景が描かれているなど、色々と阪神間を舞台に描いた作品はあるのですが、「涼宮ハルヒの憂鬱」のような若い人向けのライトノベルの中でも、意外に西宮の風景が描かれているということを理解してもらえればと思います。

最近、「聖地巡礼」という言葉がよく聞かれるようになりました。僕より上の年代の方であれば聖地巡礼といいますと、杖を突きながら四国を歩いて回るというようなイメージをもたれているのかなと思います。もともと聖地巡礼という言葉の意味は、お遍路さんの寺社仏閣を順々に巡っていくことをいうのですが、最近、ニュースとして取り上げられるのですが、聖地巡礼ブームという言葉が色々なメディアでよく聞かれるようになりました。これは何も前の首相の菅さんが四国お遍路に行くからといって、お遍路ブームが来たというわけではなく、本来の意味での聖地巡礼はずーっと途絶えることなくブームの状態ですよ。こういうのとはまた違った意味で、聖地巡礼ブームというのが新たに起こっています。どういうことかということ、例えば「涼宮ハルヒの憂鬱」という作品があって、そのアニメに描かれた風景を「どこの風景かな？」と確かめにやってくるファンたちの行動を指しています。おそらく「涼宮ハルヒの憂鬱」が一番インパクトがあったかと思いますが、その後、続けてヒットしたアニメ「らき☆すた」の背景として描かれている埼玉県にファンが集まって様々なイベントが行われました。また、最近では「けいおん！」というアニメがヒットした際に、舞台となった滋賀県の歴史的な小学校の周辺にファンが集まるという、いわゆる聖地巡礼現象が立て続けに行われました。こんな時、「これは何かうまい話になるに違いない」という風に、色んな人が考えるんですよ。結構ファンが集まるような時にはこれを使って一儲けという発想が生まれるんですよ。これはもちろん、ファンがやってくる聖地が地元にあたる人たちがブームに上手く便乗して商売にしようということもやっている部分もある。また一方で、商売抜きで純粋にイベントを楽しみたい、イベントをお手伝いしたいというファンの姿もあるわけです。かたちはそれぞれですが、聖地巡礼がいまブームになっています。

話はかわりますが、実は西宮市は涼宮ハルヒ作品のモデルではないということになっています。そんなこともあって、今回の西宮まちたび博覧会という西宮市公式イベントで、涼宮ハルヒに関するイベントが行われるのは初めてなんですね。ファンの間では、これは非常に画期的なことだということで盛り上がっているんです。しかしですね、ライトノベルである「涼宮ハルヒの憂鬱」のイベントであり、アニメの「涼宮ハルヒの憂鬱」とは関係ないものだそうです。よくわからないかもしれませんが、アニメ作品の場合とライトノベルはまた違う権利関係があるそうなので、西宮市がアニメ「涼宮ハルヒ」の舞台とは言われていないということを受けて、これまで西宮市では、埼玉県や滋賀県でやったような「涼宮ハルヒ公式イベント」は行われていませんでした。今回、西宮市が公式にイベントを行ったということで、今後「涼宮ハルヒシリーズ」は、西宮市が生んだ作品だと認知されていくのではないかという期待を持っています。

ところで、聖地巡礼ブームというのは、何となく新しい現象のように世間では言われて

おりますけども、実はこれはずっと昔から本好き・映画好きの人がやっていたことですよ。つまり、作品に描かれた舞台を見たい、その場所に行ってみたい、同じ場所に立ちたいという、やむに止まれない衝動にかられることがあるわけなんですよ。

皆さんがどのくらいこのような衝動にかられたことがあるかはわかりませんが、その作品に描かれた舞台に行ってみたいという、まるで幼い子どもが描くような夢を大人になってから実現してしまうようなものが、もともとの聖地巡礼の姿だったのかなと思います。皆さんは「シャーロキアン」という言葉をご存知ですか。これは世界中におりまして、いわゆる「シャーロック・ホームズ」の熱烈なファンや研究をしている人のことを指します。「シャーロキアン」には、厳密にはもっとしっかりした定義があると詳しい人からは怒られてしまいますが、これらの人たちは「シャーロック・ホームズ」の作品について隅々まで知り尽くしており、実際にロンドンのベーカー街にいてシャーロック・ホームズが下宿をしていたといわれるシャーロック・ホームズ博物館ですとか、あるいはシャーロック・ホームズという名前がついたパブへと旅行に行くわけです。ただ、皆さんもご存知のとおりシャーロック・ホームズのお話はフィクションですので、彼は実在しない人物なのですが、ファンがたくさんいるもので、シャーロック・ホームズ博物館がある場所に住んでいたということになっていますよね。フィクションということを知ってファンは楽しんでいるわけです。例えば、シャーロック・ホームズというとNHKで放送されていたイギリスのドラマ版が有名で、非常に渋くて人気がありました。最近はハリウッドでリメイクされまして、はちゃめちゃな冒険活劇になっておりますが、時代を超えて愛されている作品です。ロンドンの地下鉄を上がったところのベーカー街に、シャーロック・ホームズの銅像が立っていて、フィクションの人物ですが街のシンボルになっています。日本では、サザエさんの銅像が立っていて、波平さんの髪の毛が抜かれたということでニュースにもなったりしました。フィクションだけでも街のシンボルになって、ファンが集う場所。そういう場所を聖地巡礼するという流れになっているわけです。

これもよく聞く話なのですが、「赤毛のアン」の愛読者の方が、一度はこの作品の舞台であるカナダのプリンスエドワード島に行ってみたいと思うんだそうです。何を隠そう私の嫁さんが「赤毛のアン」の愛読者でありまして、「プリンスエドワード島に一度は連れて行け」というような無理な注文をするのですが、カナダはカナダでも結構遠いんですよ。この島は、大西洋側に位置しまして日本から行こうとすると大陸を横断する必要があり、かなり遠いようなのですが、それでもプリンスエドワード島に行きたいという気持ちがあるようです。実のところ「プリンスエドワード島・赤毛のアンに会いに行こう」というようなツアーもあります。めちゃ高いんですけども…。このように「赤毛のアン」の愛読者もいます。

また、最近ではハリーポッターが有名で、ハリーポッターの熱烈なファンをポッターアンというそうです。映画ハリーポッターの最初のロンドンの駅でのシーン、ハリーとロンがカートを押しながら壁をすり抜けて、魔法の国行きの列車が止まっているホームへ進む

というのがあります。これは、そのロンドンの駅の写真なのですが、先程説明した映画のシーンをイメージして、半分壁の中に入り込んでいるカートがちゃんと再現されています。その辺、イギリスの人は遊び心があってなかなか面白いですよ。西宮北口の駅にも何か再現して欲しいですが…。そんな感じで愛読書や大好きな映画の舞台を訪れる聖地巡礼というのが行われています。

これはちょっと余談になりますが、村上春樹の愛読者のことを最近ハルキストと呼ばれておりまして、私なんかもこのハルキストの走りなんです。村上春樹の作品の舞台を聖地巡礼しているという例もあります。

ライトノベルの「涼宮ハルヒの憂鬱」の聖地巡礼をする方は随分たくさんいらっしゃるみたいで、西宮市内の何の変哲もない住宅街を若い人たちがカメラを片手にワイワイ盛り上がりながら歩いているような場合、それは聖地巡礼中のファンかもしれません。

では、どんなところが聖地になっているのかというのをいくつかご紹介したいと思います。まず、アニメではなくライトノベルの中に出てくる主な地名を挙げますが、「祝川」と書いて「しゅくがわ」と読んでいます。もちろん「しゅくがわ」というと全国的に見ても西宮の川ですので、少し漢字が変わっていてもわかりますよね。特に、関西の人なら知らない人はほとんどいないと思うんです。お花見の名所でもありますし。ちなみに夙川の「夙」は、「夙（つと）になんとかする」という際に使う漢字ですが、結構知らない人にとっては読むのが難しい漢字で、読めない地名のひとつになっていたらしいんです。「涼宮ハルヒの憂鬱」を読んで西宮の地名を覚えたなんていう、よくわからないコメントを見かけたことがあります。知らない人は「夙川（つとがわ）」と間違えて読むことがよくあるみたい。また、甲陽園なんです。一文字だけ変えて「光陽園」となっています。甲陽園の地名も関西の方なら、「ああ地理的にもこれはあの閑静な甲陽園に違いない」ということで場所がわかるんですよ。また、これが関西の阪神間の話かと思って読むと、「北口駅といったら西宮北口駅しかないじゃないの」という話になるわけですよ。ただ、北口駅という名前だけではどこの北口駅かわからないです。日本全国どこにでも北口駅というのはあるかもしれないですから。ただ、作品を読むとどこの北口駅かわかるようになっているところがあるのでご紹介します。

※引用

「北口駅はこの市内の中心部に位置する私鉄のターミナルジャンクションということもあって、休みになると駅前にはヒマな若者たちでごった返す。そのほとんどは市内からもっと大きな都市部に出て行くお出かけ組で、駅周辺には大きなデパート以外に遊ぶ所はない。」

(谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』角川スニーカー文庫 平成15年 P138より)

というような描写がされています。

これが関西の話として、その市の中心部に位置する私鉄のターミナルジャンクションで北口といったら西宮北口駅しかないですよ。神戸であっても、尼崎であっても、大阪であっても北口駅なんてないですから、関西で北口駅といったら西北しかないじゃないかとわかるんですね。しかも、作者は西宮育ちの人なのでよくわかってらっしゃるんでしょう。

「市内からもっと大きな都市部へ出て行くお出かけ組み」。

要するに西北の駅は、ガーデンズができた最近でこそだいぶ変わったようですけども、やっぱり昔の西北駅を思い返すと乗換駅だったわけですよ。私なんかは大阪の人間ですので、そう思うのかもしれませんが、「西北で降りて遊ぶ」なんてことはあまりなかったですね。西北で乗り換えて甲山であったり、神戸の方であったりと出掛けていく、いわゆる乗換駅だったわけで、作者は西宮育ちだけあってよくわかっているというところですよ。そして、

「駅周辺には大きなデパート以外に遊ぶ所なんかない」

という部分の大きなデパートというのは、おそらくアクタ西宮のことをイメージしているのではないかと考えられます。というのも、この作品が書かれた時には、まだガーデンズが建てられてなかったですから。今だったらこの部分を読んで「ああガーデンズのことかな」と思う読者もいるかもしれませんが。このように西宮北口駅が登場します。でも、これが関西の話じゃなかったらこれまでの予測は全然違って来るかもしれません。

ところが、これが関西の話と判断できる動かぬ証拠がありまして、涼宮ハルヒが作品中で、子どもの頃にお父さんに連れられて野球を見に行く回想シーンがあります。その野球場はどういう野球場かといいますと、満員で5万人くらい入る規模なんですよ。5万人入る野球場っていうのは、実のところ甲子園球場か東京ドームしかないんですよ。これが東京のお話であれば野球場は東京ドームでしょう。ただ、この作品は、どうやら東京ではない地方都市での話ということがいわれていますので、東京ドームではないということになります。そうすると、涼宮ハルヒが子どもの頃に連れて行かれた野球場というのは甲子園球場しかないんですよ。よって、これは関西の話だとはっきりするわけです。作者がそこまで意識して書いたかどうかはわかりません。一応ですが、描写されているのは関西なんだなということがそれでわかることになります。

ちなみに、桜の時期の夙川の様子も出てきます。また、甲陽園駅から歩いて高校へ通学するということになっています。西宮市内の地理に詳しくれば、甲陽園駅から歩いて通学する道も容易に想像できるのではないかと思います。学校は山の上であって、非常に急な坂道を毎日上り下りするという設定になっています。「学校が終わって坂を下り、甲陽園駅から私鉄に乗って北口駅に到着する」となっているのですが、これは実際のところ少しデ

フォルメされています。残念ながら設定上、夙川駅がないんですね。たぶん面倒くさかったんでしょうね。作者の気持ちが何となくわかるんですが、説明するのがややこしいところは、つい簡単にしちゃうようなことがあってですね。甲陽園から夙川で乗り換えて北口で降りてというのが面倒くさいので、甲陽園からいきなり北口駅に着くようにしちゃったんですね、きっと。西宮北口駅の北側に広場がありまして、その広場が作中で主人公たちが集合する場所として描かれています。この集合場所から、喫茶店に行って、そこでたむろしているというシーンが多いんです。このシーンが全国的に知られているらしいのですが、この作中に登場する涼宮ハルヒたちがたむろしている珈琲屋ドリームというのが、西北の商店街に昔からあるコーヒー屋さんでモデルになっているといわれています。

アニメを見ると、この珈琲屋ドリームが店の前から店内まで細かく背景に表現されていて、店を知っている人ならば一目瞭然なんですけども、ライトノベルの方ではそこまで詳細には描いていません。西北の駅前向かいの喫茶店と表現されてまして、実際の珈琲屋ドリームとは位置関係も微妙にずれていたりします。でも、珈琲屋ドリームをイメージして書いたのかもしれないというのはわかります。そのあたりについては作者の谷川流氏が、昔この喫茶店の常連だったということがわかっていることもあり、おそらくここがモデルになったんだろうなという風になっているんだと思います。この作品をアニメ化する時に、アニメスタッフと作者の谷川流氏が一緒に珈琲屋ドリームを取材・ロケしまして、ドリームのマスターに「これがアニメ化されるんです。」と説明があったということですので、この店は作者公認のモデルと言えるかと思います。

また、これは少し裏話になりますが、ドリームのマスターである細見さんにお話を聞くと、「常連の谷川流さんは知っていたが、彼が小説を書いているとは知らなかった。ある日突然アニメスタッフとやって来てアニメ化されるという話を聞いてびっくりした。」とのことでした。マスターは、その時に初めて、ライトノベルの原作を1冊寄贈されたそうですが、谷川流氏からは「好みに合わないと思うので読まないで下さい」と言われたと聞いております。ただ、先程も申しましたとおり、一応モデルだといわれている西北の商店街の喫茶店ドリームですが、位置関係を考えると違うかもと考えられるんです。実のところ喫茶店の中の描写が少なくて決め手に欠けるんですよ。実はモデルの候補になる喫茶店がもうひとつあって…。今の西北の駅のロータリーがありますね。広場があって、ロータリーがあって、西北商店街があるんですけども、昔その角にマルコポーロという店があったということで、学生がけっこう集まる場所だったという話も聞いています。作者の谷川流氏は西宮で育って、そして大学は関学に行っていますので、ひょっとしたら最初はマルコポーロの方をイメージして書いた可能性もあります。アニメにする時に、珈琲屋ドリームの方を喫茶店のイメージに変えた可能性もあります。その辺は本当に作者に聞くしかわからないのですが、色々なモデルの可能性もあります。

さあそんなところで、ここからは谷川流さんと涼宮ハルヒの作品に踏み込んで行きたいと思います。まず、最初に谷川流さんの人物像に迫っていくこととなります。まず確認し

ておいて欲しいのですが、これまで説明したことについて谷川流さんが直接お話になったことではないんですよ。実のところ作品をいろんな形で文学研究するとき、生きている作家の場合はなかなかやっかいで、逆に夏目漱石のように亡くなった作家、死んだ作家の研究をする場合は、いろんな文献が残っていてかなりの部分が明らかになっているので、作品が生まれる秘密など色々と調べやすいのですが、生きている作家の作品を研究するとき、基本的には作品とそれに関する文献資料、あとは作者本人が語っているエッセイやインタビューが研究材料になってきます。できれば作者本人にインタビューできたらいいのですが、村上春樹氏も谷川流氏もインタビューになかなか応じてくれないですね。表に出てこない作家で有名な人で、インタビューを申し込んでもほとんど了解されない。僕も何度かインタビューを申し込んでいたのですが、全く了解してくれないんですよ。そこで、少しフットワークを活かしまして、作者の周辺の方を探して周辺取材するわけです。谷川流氏に近い人を何人か取材しまして、それをもとに恐らくこういう作品の成立事情だったのではないかと考えるわけです。ところがですね、先程紹介しました西宮まちたび博の「SOS団 in 西宮に集合よ！」の会場に、谷川流氏のメッセージが寄せられていまして、今朝初めてそのメッセージを見たんですよ。「西宮まちたび博に寄せて、自分と西宮」という、かなり長文の文章がパネルで寄せられています。それを読むと僕が色々フットワークを使って調べ、想像して書いたようなことが、ご本人のメッセージの中で語られていて「もう少し早く教えてくれよ」と言う感じだったのですが…。皆さんも会場へ行かれて谷川流氏の書いたメッセージを読まれましたら、西宮の育ちの中で原風景というものがある、それが作品の中に生かされているようなことを作者自身がちゃんと解説しております。そんなわけで、これまでのお話も全く根も葉もないというわけではないようです。

さて、ここからはあらかじめお断りしながらお話したいのですが…。今、写真を出しているのは上ヶ原中学という西宮市立の中学校なんですけど、涼宮ハルヒの作品の中に「校庭落書き事件」というのがありまして、中学校の校庭に謎の絵文字が石灰で書かれて、それが新聞記事になるというエピソードが出てきます。その時に謎の絵文字が描かれた中学校のグラウンドというのが、上ヶ原中学のグラウンドであろうと設定上いわれています。これはアニメ作品の方でロケされており、背景に描かれているのが上ヶ原中学。そして、門のところは大社中学校の門となっています。ここから、大体どの辺の場所を使っているかというのがわかってきます。この辺は考察になりますが、もし、小説の中の涼宮ハルヒの出身校のモデルが上ヶ原中学校とすると、谷川流さんは上ヶ原中学校の出身なんですね。作者の谷川流氏は上ヶ原中学の出身で、語り手の男子高校生キョンというのが、もし谷川流自身の投影であるとする、つまりキョン君＝作者であるとする、涼宮ハルヒの出身学校は上ヶ原中学でない。この二人は出身中学校が違うという設定になっていますので。じゃあどこかとなると、当時の北高にあたる県立西宮北高校区が上ヶ原、大社、平木、苦楽園という4つの中学校からできていたということと、その中で涼宮ハルヒとキョン君が同じ方向へ帰っているはずですから、涼宮ハルヒの出身校は大社中学か平木中学のどちらか

になります。その二つの内、大社中学の門がロケで選ばれていますので、彼女は大社中学の出身でなかろうかとなるわけです。こんなことに興味のない人にとってはどっちでも良いような話で大変恐縮なのですが、ファンはその辺を色々考えるのが楽しいですね。「涼宮ハルヒの出身中学のモデルはどこかな」と考えて、「きっとこのグラウンドに違いない」ということを考えるのです。

また、西宮の有名な風景で「甲山の風景」がありますが、作品の中で鶴屋さんという大金持ちのご令嬢がいて、その人物の家が所有している山で鶴屋山というのが出てくるのですが、県立西宮北高校からの位置関係を考えると、これは恐らく甲山がモデルであろうと色々想像してみたりするのが楽しいわけです。また、図書館の話がしょっちゅう出てきます。図書館といえば、今はアクタ西宮に北口図書館がありますね。ところが、谷川流さんの図書館というのは、どうやら中央図書館ではないかと。これは谷川流さんが小さい頃に行くとしたらどこの図書館かなと考えることがモデル探しになるわけです。もっと気になりますのは作中のヒロインであります。涼宮ハルヒにモデルがあるとすれば、それはどういう人であるのかということも想像したくなりますね。これは、作者自身がこういう流れを焚き付けた面がありまして4作目の「涼宮ハルヒの消失」のあとがきでモデルのことを書いています。それをレジメの方で少し引用しました。レジメの見開きの左のページに「ハルヒのモデル」ということで、「涼宮ハルヒの消失」のあとがきを引用しております。このあとがき自体がフィクションでなければですが、涼宮ハルヒは、作者が高校時代に、ひとつ年上の文芸部にいたことがある女の先輩がモデルであるようなことを書いてあります。でも、実のところ作家というのは基本的には本当のことを言っているとは限らないのです。たとえあとがきであっても、それはフィクションとして書いている可能性がある。その最たる例が、村上春樹の「風の歌を聴け」という小説ですが、あとがきの中にいかにももっともらしくかかっているアメリカの作家のことが嘘八百とイイますか、完全にフィクションで、それを真に受けて作家のモデルを調べようとしたファンがいましたが、全然わからないということがありました。蓋を開けてみれば、実はあとがきがフィクションでしたという話でしたけども、要するに村上春樹氏も谷川流氏もそうですが、あとがきに書いてあることが本当かどうかはわからないんですね。ですから、谷川流氏が高校の文芸部にいた時に、そのモデルになる女性がいたかもしれないということが何となく想像できるわけです。

色んな作品の背景を探っていくと、なかなか面白いことがわかるんです。作者が通った中学校の風景が、アニメの作品の背景に選ばれているわけですが、小説ではその辺の詳しい情景描写がされていない。この写真は、上ヶ原の辺りから西宮市内を見下ろした風景ですけれども、小説の中ではこの辺りの風景について詳しく描かれていません。でも今回、谷川流氏が涼宮ハルヒの作品を書く時に、彼が育った西宮の原風景を再現しているということが、作者自身のメッセージの中で裏付けられました。実は、谷川流氏が住んでいた場所というのが上ヶ原近辺とわかっていて、その原風景というのが小説の中で描かれる

背景と酷似しているわけです。「小学校に通っている歩道橋の上から綺麗に甲山が見える」とかですね。おそらく、谷川流氏のもつ故郷の原風景に甲山は強いイメージとして残っていたであろうことから、鶴屋山を描く際に甲山をイメージしたということも考えられるでしょう。この歩道橋から見た西宮の街の風景、あるいは山の風景などが、作品で描かれている風景のモデルになったであろうことは、だいたい想像がつくわけです。アニメの方では、それをスタッフがロケしまして、背景として描いているんです。更に、作品の成立過程を考えますと、原作の小説で描かれた風景があり、その風景が作者自身のメッセージで西宮の原風景であるということが明らかになっており、アニメスタッフが背景をロケハンする時に原作者の谷川流氏自身が同行して、「だいたいこの辺だよ」というのを説明して回っているんですよね。要するに、アニメを制作するために、作者がもつ原風景のイメージを参考にしているということが明らかになっている以上、西宮がアニメ「涼宮ハルヒシリーズ」のモデルと言っても良いと個人的に思うのですが、やはり大人の事情ということなのか、アニメの「涼宮ハルヒシリーズ」のモデルは、西宮ではないということになっているんです。もうそろそろ認めて欲しいところですが、そんな感じでモデルになった風景についてご説明させていただきました。

これは学校のホームページから拝借しましたが、西宮北高校の航空写真で、ここが涼宮ハルヒたちが通う北高校のモデルといわれており、そして作者の母校でもあるわけです。作者自身が、色々なところで作品について解説している例がいくつかあります。これが谷川流自身の谷川流作品ということで、「涼宮ハルヒシリーズ」のそれぞれのあとがきの中で、自分自身のことをちょこちょこ書いてあるところもあるので、レジュメの中でも紹介させていただいております。読んでみるとどんなイメージで作品が出来上がってきたかを考えるヒントになるんです。

谷川流という人は、たくさんライトノベルを書いているのですが、「涼宮ハルヒシリーズ」があまりに有名になってしまったために、そんなに知名度がないんですね。彼の作品に「学校を出よう！」というのがあるのですが、これにもいくつか西宮らしき描写が出てきます。これは完全にSF小説のライトノベルであって、超能力をもった子どもたちが山の中の学校で生活しているという設定のお話なんですけどね。山の中の学校から、ずーとバスで降りてきて、街に到着するというシーンがありまして、この辺がいかにも、谷川流さんが育った上ヶ原の辺りからバスに乗って、西宮北口の辺りに降りてくる様子を彷彿とさせるところがあります。駅の描写も出てきまして、

※引用

「各駅停車しか止まらない、周囲はほとんど住宅地というこの駅の利用客は、この昼過ぎの時間帯には用がないと見えてプラットホームに立っているのは僕と優弥の二人だけというガラガラぶりである。」

(谷川流『学校を出よう!』電撃文庫 2003年 P154より)

という風に表現されています。これはおそらく昔の夙川駅ではないだろうかと考察されていまして、バスで山を降りてきて夙川駅に着くという、西宮を彷彿とさせるような位置関係が描かれています。このように「涼宮ハルヒ」シリーズ以外の作品のあとがきにも、作者の作品をつくるときの成立過程のヒントが隠されています。最後に紹介するのは、レジュメの一番最後になります谷川流が作家としてデビューしたての時のインタビュー内容です。その中で、作家になる前は、婦人服のチェーン店に勤めていたことなど、色々なことが書いてありまして、やはり作品のベースには学園ものがあり、「学園ものにはノスタルジーがある。学校生活がこんなだったら良かったのになという願望が作品に込められている」というコメントが掲載されています。基本的にライトノベルというのは、学園ものが多いジャンルで、谷川流さんの作品も学園ものがほとんどで、「涼宮ハルヒシリーズ」は学園もののSFコメディという作品です。作者自身が「自分が味わうことのできなかつた理想の学園生活のようなものを書いているんだろかな」というようなことをデビュー当時に語っております。また、「涼宮ハルヒシリーズ」というのはライトノベルにしてもアニメの作品にしても基本的には若い世代をターゲットにしているのは間違いないです。しかし、色んな年齢層の人に受け入れられる作品であるとも言えるんですよ。なぜそうなのかということですが、それは作品のテーマというかベースにあるのが、学園生活へのノスタルジーだろうということが言えるんですよ。おそらく日本人の場合は多くの方が、学校生活への強い想いがあり、中にはネガティブな気持ちもあるかもしれませんが、学校生活をいい思い出としてもっている人も多いのであろうと。また一方で、自分の学校生活はあまり大したものではなかったけども、叶わなかった夢みたいな理想の学園生活を心の中に描いている方も結構いるかもしれませんね。そういった理想の学園生活へのノスタルジーが作品の中に込められているので、これを読む人、あるいはアニメを見る人の心の中にある学園生活への想いがこれに共鳴するわけです。ですから、「涼宮ハルヒ」シリーズが万人に伝わるというのは、谷川流さんの非常に個人的な思い出から生まれてきた作品だけでも、そこに共通の想いがあるからなのだろうと考えるわけです。

では、ここで少し映像を見ていただきたいのですが、これは映画「涼宮ハルヒの消失」のメイキング映像です。この場面は、スタッフがロケ地を回っているところなんですが、どこかで見たことがある階段だなと思われた方もいらっしゃるかもしれません。キャプションには「2010年1月某日・神戸」と出ております。ここが最大に残念なところであって、なぜ西宮じゃないんだということが言いたくなるわけです。このメイキング映像は、映画「涼宮ハルヒの消失」が神戸を舞台につくられたような印象を与えますよね。実際は、映画中の大半の風景は西宮なのですが。なぜこの西宮の風景が神戸ということになったのかはわかりませんが、このメイキングを見る限り、西宮のロケということにはなっていないんですよ。ちょっと資料的に見ていただいたんですが、西宮が生んだ「涼宮ハルヒ」という作品であるはずが、なんとなく西宮は関係なくなっている。これはメイキング映像

ですけれども、キャプションをわざと間違えたのか、単純な間違いなのかわからないですが、西宮と関係なくなっちゃっているんです。本当は西宮が生んだ作品なんだといえるようになったらいいなと思います。

ちなみに話は脱線しますが、映画「阪急電車」というのがありますが、有川宏さんのベストセラー小説「阪急電車」は阪急電車の今津線沿線の風景を各駅停車で順番に描いてきますよね。宝塚市半分、西宮市半分くらいの割合で描かれている物語であって映画化するときも、本当は西宮がもっと入るはずなんですけど、映画を作るときに神戸の映画フィルムコミッションというロケ地を誘致する組織があつて、今津線とは関係ない神戸の風景ばかり出てきて、なんでそこにいくのかなと思うわけです。阪急電車沿線の話なのに突如、神戸市内の店に行くなど、地元の間にはかなり違和感がある場所が選ばれていますが、それは神戸市がロケ地を誘致しているからなんです。西宮市ももっとそういうことに積極的になったらいいのにと、私みたいな、よそから来た人間からするとちょっと歯がゆくなる気がします。西宮市には様々な文学作品、映画作品の文化遺産的なものがたくさんありますので、今回の西宮まちたび博をきっかけに全国で知られるようになったらいいなと思っています。ちょうど3時になってしまいましたのでこの辺で終わろうかなと思うんですが、何かもしご質問があればお受けします。

質問：北口の描写のところ、駅の近くにある大型店舗がアクタ西宮じゃないかといわれましたが、またその後の話でアクタの北口図書館と喫茶店の話、ドリームとマルコポーロと合わせたものじゃないかと、私は大型店舗はこのアクタでなく当時南側にあったニチイでないのかなと思いました。その当時大型店舗がそれほどなかったの。

土居：それはありうる話ですね。谷川流さん自身、どの辺を想定して書いているか、これまでは明らかでなかったんですけど、今、下へ行って谷川流氏直筆のメッセージを見ると1990年前後の西宮を思い出して書いたとあります。その当時、アクタはなかったですから、アクタがモデルでないとと言えるわけです。震災前の西宮を知っている人であればそれは分かりますね。それを知らない人であれば駅の近くの大型店舗としてアクタを想定するし、もっと新しい人は当然ガーデンズを想定しますね。作者が描いた原風景と、実際に読者が思い描く風景の間の時差といいますか、ギャップは段々開いてゆくといえますね。ですから図書館のモデルも作品の中では西北のところに図書館があることになっていますが、実際にはその時はなかった。その辺り作者が思い描いた物語のなかの風景と、実際に読者が思う風景との差、ギャップはそれはそれでモデルを探すときの楽しみでもあり、或いは作者の描いた風景を想像するときの楽しみでもある。色々な風景が合体した理想の西宮を想像すると面白いかなと思います。お答えになってないかも知れませんが、貴重なメッセージありがとうございました。

他にありましたらどうぞ。

質問：上ヶ原から下りてきた場合、私は甲東園の駅かなと思うのですが・・・。

土居：それも実のところ西宮かどうか何もヒントがないんですが。山があつて海があつて、その間に住宅地があつて、典型的な阪神間の風景のような描かれ方でわりと海のほうへ来ている。だから、まあその辺は想像ですね。少なくとも西北ではないだろうと思うのですが、要するにバスで下りてきて海の近くの駅へ、そういったところがいかにも西宮ですね。正確にはわかりませんが。

質問：谷川流さんはおいくつの方ですか。

土居：谷川流氏のお歳ははっきりとは発表されてはいませんが、恐らく私より二つ三つ下くらいの年代のようです。いま40過ぎくらいでしょう。お会いしたことがないので。こっそり言うと県立西宮北高校のホームページで活躍している卒業生というのが載っており谷川流さんとオリックスの田口選手が載っています。

このあと

「西宮まちたび博」イベント会場に行かれる方は3時15分にこの前でお待ちください。それでは、これで終わります。